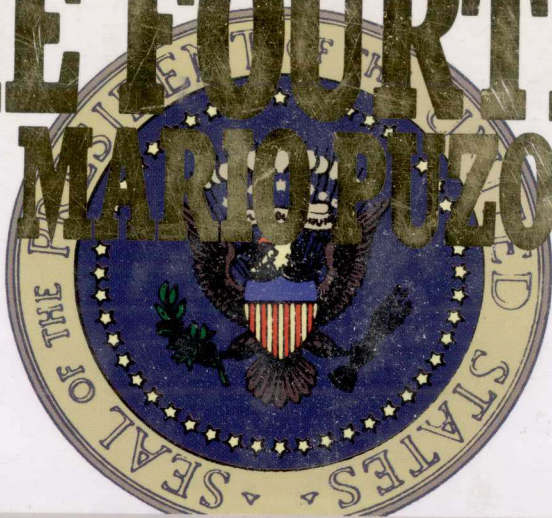


THE FOURTH K MARIO PUZO



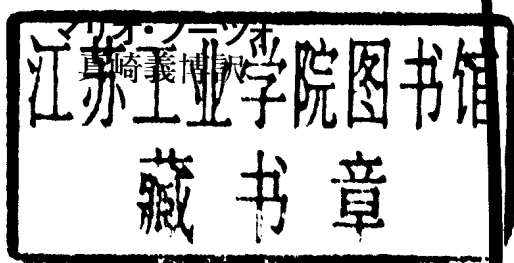
四番目のK

マリオ・プーゾ

真崎義博

訳

四番目のK



Hayakawa Novels

THE FOURTH K

by Mario Puzo

Copyright © 1990

by Mario Puzo

First published 1992 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with

Candida Donadio & Associates, Inc.

through Japan Uni Agency, Inc., Tokyo.

四番目のK

1992年 5 月20日 初版印刷

1992年 5 月31日 初版発行

著 者 マリオ・プーゾ

訳 者 ^ま真 ^{みさ}崎 ^{よし}義 ^{ひろ}博

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2—2

電話 東京(3252)3111(大代表)

振替 東京・6-47799

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-207748-4 C0097

Printed and bound in Japan

四
番
目
の
K

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1992 Hayakawa Publishing, Inc.

私の子どもたちへ

アンソニー

ドロシー

ユージン

ヴァージニア

ジョセフ

第一部

聖金曜日―復活祭の日曜日

オリヴァ・オリファントは百歳で、心は鐘のように澄んでいた。これは、彼には不幸なことだった。あまりにも澄んでなおかつ狡猾な心であるがゆえに、多くの道徳律を破るときも良心は清潔であつてほしいと願うのだった。狡猾な心の持ち主であるオリヴァ・オリファントは、ほとんど不可避ともいえる日常生活の罫に落ちることはけつしてなかった。一度も結婚などしなかったし、政治家に頼ることもなかったし、絶對的な信頼をよせる友人ももたなかった。

アメリカでもっとも裕福な、おそらくもっとも力をもった民間人であるオリヴァ・オリファントは、ホワイトハウスからほんの十マイルしか離れていない世間から隔絶された警戒の嚴重な屋敷で、自分の名付け子であるアメリカ合衆国司法長官クリスチャン・クレイの到着を待っていた。

人を惹きつけるオリファントの魅力には、その聡明さに劣らないものがあつた。彼の力はその双方から生まれていた。百歳という高齢にもかかわらず、「賢人」というニックネームがつけられるほどその分析力には定評があり、いまだに有力者たちからアドヴァイスを求められている。

企業の社長へのアドヴァイザーとしての「賢人」は、これまでにも經濟危機、株価の暴落、ドル安、外国資本の撤退、原油価格の高騰などを予言してきた。彼はソヴィエト連邦の政治的な動向を予言し、民主党や共和党のライヴァルたちの予期せぬ握手も予言した。しかしなによりも、彼は百億ドルという

資産を形成してきた。それはどの資産家のアドヴァイスとあれば、たとえそれがまちがえていたにしても重視されるのは当然だ。とはいえ、『賢人』のアドヴァイスにはとんどまちがいはなかったが。

この聖金曜日、『賢人』はひとつのこと頭を痛めていた。この地上に生を受けて百回目の誕生日を祝うパーティのことだ。そのパーティはホワイトハウスのオーケストラ・ガーデンで開かれることになっており、ホストはほかならぬ合衆国大統領のフランシス・ザック・ケネディだった。

『賢人』がこの壮観な行事を大いに楽しむのは、彼にとっても許される範囲の虚栄だった。一瞬にせよ、世界は、このことをもう一度思い出すことだろう。私にとっては最後の晴れ舞台になるかもしれない、彼は寂しく、たった。

聖金曜日のロンドンでは、七人のテロリストたちがローマ・カソリック教会の法王を殺害すべく最後の準備をすすめていた。男四人、女三人からなるこのグループは、自らを人類の解放者だと信じていた。彼らは『暴力のキリスト』と名乗っていた。

このグループのリーダーは、テロの経験が豊かなイタリア人の若者だった。今回の作戦で、彼はロメオというコード・ネームをもっていた。彼はこのコード・ネームがもつ皮肉に満足し、その感傷性が彼の理知的な人類愛をくすぐっていた。

聖金曜日の夕刻、ロメオはヘインターナショナル・〇〇〇が用意した隠れ家で休んでいた。煙草の灰や汗がしみたしわくちゃなシーツのかかったベッドで、彼はベイパーバック版の『カラマーゾフの兄弟』を読んでいた。緊張か、おそらく恐怖のゆえに脚の筋肉が痙攣したが、たいして気にはならなかった。いつものようにやがて消えるだろう。しかしながら、今回の任務はひじょうに困難かつ複雑で、肉体的にも精神的にもかなりの危険をはらんでいる。この任務によって彼は真の『暴力のキリスト』になる。この名称については、あまりの陰険さに彼はいつも笑いを禁じえなかった。

ロメオの本名はアルマンド・ジアンジといい、富裕な上流階級の両親のもとに生まれた。両親は彼に活気のない、贅沢な、信心深い躰をほどこした。こうした躰が彼の禁欲的な性格に悪い刺激を与え、十六歳のときに彼は財産とカソリック教会を捨てた。そしていま、二十三歳の彼にとって法王を殺すこと以上に大きな反抗はなかった。しかし同時に、ロメオには迷信上の不安があった。子どものころに、彼は赤い帽子をかぶった枢機卿から聖なる堅信礼を受けていたのだ。ロメオは不吉な赤い帽子が地獄の火の色だということをかたときも忘れたことがなかった。

あらゆる儀式によって堅信礼をほどこされたロメオは、無数の人間が彼の名前を呪うことになるほどの犯罪を実行する覚悟を決めたのだった。本名も知れることになるだろう。自分が逮捕されることも計画のうちだった。しかし将来は、ロメオも現在の過酷な社会的階層の変革に力をつくした英雄として認められるだろう。今世紀には忌まわしきものとされていることも、来世紀には気高いこととされるだろう。逆もまた真なりだ、彼はにんまりしてそう思った。何世紀もまえにはじめて「イノセント」という名前を名乗った法王は拷問を認める大勅書を発令し、真の信仰を広めて異教徒の魂を救った功績を讃えられた。

またロメオが秘蔵を計画している法王が教会によって列聖されるだろうということも、彼の若者らしい皮肉好き部分を感じつけた。彼は新しい聖者を創造することになるのだ。その聖者というもののすべてを、いかに彼が憎んでいたことか。イノセント四世、ピウス、ベネディクト、彼らはあまりにも神聖化されすぎている。彼らの蓄財、人間の自由という真の理念に対する抑圧、無知という魔法や正直さへの侮辱によって地上の哀れな者たちを窒息死させた尊大な魔法使いたち。

〈暴力のキリスト〉のヘファースト一〇〇〇の一員である、メオは、その露骨な魔法を消し去る手助けをするのだ。俗にテロリストと呼ばれる、ヘファースト一〇〇〇は、日本、ドイツ、イタリア、スペイン、それにチュールリップの国オランダにまで広がっている。アメリカにヘファースト一〇〇〇のメンバーが

ひとりもないのは、アメリカにいても何の意味もないからだ。民主主義の国、自由が生まれた国、そこには血を見ただけで失神してしまふような頭でっかちの革命家しかない。退避勧告を出してから建物を爆破するテロリストがどこにいるだろう？ 家々の正面階段で堂々と不貞をはたらく行為を誰が理想的な反抗方法と考えるだろう？ 彼らのなんと見下げ果てたことか。アメリカにへ革命的ー〇〇〇のメンバーがひとりもないことは驚くにあたらなかった。

ロメオは夢をやめた。彼は本当に百人いるのかどうかなど知らなかった。五十人か六十人かもしれないし、たんなるシンボリックな数字にすぎないのかもしれない。しかしそういうシンボルは大衆を集結させ、マスコミの目を惹いた。ロメオが知っている唯一の事実は自分がヘファースト一〇〇〇のひとりであり、仲間の陰謀家ヤブ ril もそうだとだけだった。

ローマに数多くある教会のひとつがその鐘を打ち鳴らした。聖金曜日の午後六時にちかかった。もう一時間もすればヤブ ril がやって来て、複雑な作戦の準備状況を報告するはずだ。法王の殺害は見事に練られたチェス・ゲームの最初の一手であり、それに引きつづいてロメオのロマンティックな魂を楽しませる一連の型破りな行動が起こされることになっていた。

肉体的にも精神的にもロメオが畏れているのはヤブ ril ただひとりだった。ヤブ ril はさまざまな政府の裏切り、司法当局の偽善、理想主義者の危険な楽観論、もともと献身的なテロリストにさえある驚くべき忠誠心の喪失を熟知していた。しかしなによりもヤブ ril は革命闘争の天才だった。彼は大半の人間がもっているちょっとした慈悲心や子どもじみた同情心を軽蔑していた。ヤブ ril にはたったひとつの志、未来の解放しかなかった。

ヤブ ril はロメオよりはるかに冷酷な男だった。これまでロメオは罪もない人々を殺し、両親や友人を裏切り、かつて彼を守ったことのある判事を暗殺していた。ロメオは政治的な殺人は一種の狂気であることを理解していた——そしてその代償はよろこんで支払うつもりでもいた。だが、ヤブ ril に「幼

稚園に爆弾を投げ込めないようでは真の革命家とはいえない」と言われたとき、ロメオは「そんなことはぜったいにできない」と答えていた。

しかし、法王ならロメオにも殺せた。

とはいえこの何日かのローマでの夜、夢の胎児にすぎない恐ろしい小さな怪物のせいで、ロメオは氷から蒸留したような汗をかきつづけていた。

ロメオはため息をつき、転がるように汚れたベッドから抜け出してシャワーを浴び、髭を剃ってヤブリルがやって来るのを待った。ロメオにはヤブリルがそのさっぱりした姿をよい兆候と見るのはわかっていたし、来るべき任務に対する士気の高さの表われと見るのもわかっていた。多くの好色家がそうであるように、ヤブリルも過度と思えるほどの清潔整頓を重視していた。一方、真の禁欲主義者であるロメオは、糞にまみれても生きていけるタイプの人間だった。

ローマの通りを歩いてロメオの部屋へ向かうヤブリルは、いつものように周囲にさりげない注意を払っていた。しかし実際は、すべてが組織内部の保安と、実働部隊の忠誠と、〈ファースト一〇〇〉の結束の強さにかかっていた。しかしロメオも含めて〈ファースト一〇〇〉のなかにこの任務の全体像を把握している者は誰ひとりとしていなかった。

ヤブリルはほかの多くのアラブ人同様、シチリア人だといっても疑われることはなかった。浅黒い顔をしている彼の顎は、他人より骨の層が多いのではないかと思えるほど引き締まってごつかった。任務から解放されて暇なときは、絹のような顎髭を生やしてそのごつさを隠していた。しかし任務が与えられるとさっぱりとその髭を剃るのだった。「死の天使」として、彼は敵に自分の素顔を見せるのだ。

ヤブリルの眼は薄茶色で髪にはかすかに白いものが混じり、胸と肩はぶ厚くて顎のごつさがそこにも現われていた。低い身長のためには脚が長く、肉体的な力強さを隠していた。しかし、その目にある鋭

い聰明さは何をもってしても隠しようがなかった。

ヤブリルはヘファースト一〇〇〇の存在理念全体を毛嫌いしていた。彼は、それが物質的な世界に対して公式に拒否の姿勢を表明するたんなる大衆向けの宣伝媒体にすぎないと思い、軽蔑していた。ロメオのような大学出の革命家はあまりにも理想主義に溺れたロマンティストで、妥協ということを軽視しすぎていた。ヤブリルは革命を達成する過程での小さな腐敗はむしろ必要だという認識をもっていた。

ヤブリルはモラル上の虚飾などとうのむかしに捨て去っていた。彼には、人類の進歩のために他人からすべてを捧げられている者がもつ、はつきりとした良心があった。そして彼は、私利私欲的な行動で自分を責めるということもなかった。政敵を殺す契約をアラブ諸国の首長と個人的に結んだこともあった。オックスフォードで教育を受け、首長となるべく学んだアフリカの新しい元首のために殺人を犯すというおかしい仕事だった。尊敬さるべきさまざまな政治的指導者——生死以外のすべてを思いのままにする力を掌中におさめた人々——に対する無差別なテロだ。

こうした彼の行動はヘファースト一〇〇〇には知られていなかったし、むしろロメオにも打ち明けてはいなかった。ヤブリルはオランダ、イギリス、アメリカ、それぞれの石油資本からファンドを得、ソ連と日本の情報機関から資金援助を受け、以前にはアメリカのCIAからさえ極秘の特別任務を請け負っていた。しかし、これはずっとむかしのことだった。

禁欲主義者ではない彼のいまの暮らし向きはよかった——貧しい家庭に生まれたわけではないが、かつての生活は窮乏していた。ヤブリルは高級なワインやグルメ好みの食事を愛し、豪華なホテルを好み、ギャンブルを楽しみ、女性との肉体的なエクスタシーに溺れることもしばしばだった。そのエクスタシーにはかならず現金やプレゼントで支払いをしていた。彼にはロマンティックな愛というものに対する恐れがあった。

こうした「革命家の弱み」にもかかわらず、ヤブリルの意思の力は仲間うちでは一目置かれていた。

彼には死に対する恐怖心がなかった。これはさして驚くほどのことではないが、苦痛に対する恐怖心がないのは彼くらいのものであった。彼が冷酷無比なものもそのせいだろう。

ヤブリルは何年もかかって自分の力量を示してきた。いかなる肉体的、心理的拷問にもけっして屈することはなかった。ギリシア、フランス、ソ連での拘禁を乗り切り、イスラエル情報部による二カ月にわたる尋問にも屈しなかった。イスラエル情報部のプロには尊敬の念さえ抱いた。彼が屈しなかったのは、おそらく彼の肉体には拘束状態にあると感覚を失うという特性があつたからだろう。誰もが、苦痛にさらされたヤブリルは花崗岩のようだと知っていた。

ヤブリルに狙われた者が彼に魅力を感じることもしばしばだった。彼は自分のなかにあるある種の狂気が魅力の一部になり、彼が与える恐怖心の一部になっていることを心得ていた。あるいは、彼の冷酷さには悪意というものがなかったせいかもしれない。概して、彼は人生を楽しむ陽気なテロリストだった。これまでの人生でもっとも危険な任務の準備をしているいまでさえ、彼はローマの通りの香りや、無数の鐘がなる聖金曜日の夕暮れを楽しんでいた。

すべては順調だった。ロメオの部隊も準備は整っていた。ヤブリルの部隊は明日ローマに到着するはずだ。この二つの部隊はそれぞれ別な隠れ家に入り、連絡を取り合うのは二人のリーダーだけだった。ヤブリルは素晴らしい時期だと思った。まぢかになった復活祭の日曜日とそれにつづく数日は輝かしい創造の日々になることだろう。

ヤブリルは国々に忌み嫌う道を歩ませることになるだろう。彼は陰のリーダーたちを面食らわせ、自分の歩兵にし、哀れなロメオさえ含めて全員を生け贄にすることになるだろう。彼の計画を挫折させられるものがあるとすれば、それは死と怖じ気だけだろう。ヤブリルは通りで足を止め、教会の尖塔の美しい眺めや、ローマ市民の幸せそうな表情や、彼が未来に対してもっているメロドラマふうの思惑を楽しんだ。

しかし自らの意思や知性や力で歴史の流れを変えられると思つてゐる者の例に違わず、ヤブリルは歴史の偶発性や偶然性といったものを軽視していた。それに、彼よりもっと恐ろしい人間がいる可能性も、厳格な社会構造のなかで育つて優しい立法者の仮面を着けた者は、彼よりはるかに冷酷で無慈悲になる可能性があつた。

ローマの通りを歩く楽しそうな顔をした信心深い巡礼者、全能の神を信じる者たちを見てゐると、ヤブリルは自分が無敵だという感覚に包まれていつた。彼は胸を張つて彼らが信じる神の寛大さを超え、悪なるものの極致にまで進んで行くことになるだろう。そこではじめて善なるものがはじまるのだ。

ヤブリルはローマのなかでも貧しい者が住む地域に入つてゐた。ここの住人たちは脅すのも買取するのも容易だ。あたりに夜の帳が降りるころ、ヤブリルはロメオの隠れ家に着いた。その古い四階建てのアパートメントの建物には、石塀に囲まれた半円形の広い中庭がある。この建物の部屋はすべて革命的地下組織の管理下にあつた。ヤブリルはロメオの部隊に属する三人の女のひとりになかへ通された。彼女は細身の女で、ジーンズにウェストまでボタンを外したブルー・デニムのシャツを着てゐた。ブラジャーをしてゐず、胸のふくらみもなかった。彼女はかつてヤブリルの計画に参加したことがあつた。ヤブリルは彼女が気に入つてゐなかつたが、その残忍さは高く評価してゐた。一度口論になつたことがあるが、そのときも彼女はけつして退こうとはしなかつた。

彼女の名前はアンヌといつた。プリンス・ヴァリアント・カットにした漆黒の髪は無愛想な顔を和らげはしなかつたが、ロメオやヤブリルにさえひけを取らない激しさを秘めた燃えるような目に人々の注意を惹きつけることにはなつた。彼女はまだ今回の任務についてすべてを知らされてゐなかつたが、ヤブリルの様子からしてかなり重要なものであることは察しがつた。彼女はなにも言わずに一瞬の笑みを浮かべ、ヤブリルがなかへ入るとドアを閉めた。

ヤブリルはこの部屋が以前にくらべてひどく薄汚くなつてゐるのを見てうんざりした。リヴィング・